

2015 日本フラワー&ガーデンショウ シンボルフラワー「百合」

清楚で風を受けて揺れる様の美しさから女性の歩く姿に形容されるユリですが、北半球のアジアを中心に亜寒帯から亜熱帯に広く分布している植物です。日本にあるいくつかの固有種のうち、鹿の子百合などが江戸時代にヨーロッパへ伝わったことで有名な「カサブランカ」が生まれ、今では豪華な花形のものや花色が増えて楽しみ方も広がりました。ここでは、そうしたユリにまつわる歴史についてご紹介します。



ヤマユリの海外向けのカタログ 明治32年

ユリの歴史のお話

現在流通しているユリのほとんどが園芸用に改良された『園芸種』なのですが、かつての日本には自生種が数多く存在し、古くから人々に親しまれてきました。ヤマユリ、サクユリ、ウケユリ、キバナヒメユリ、ササユリ、スカシユリ(エゾスカシユリ等を含む)、ミヤマスカシユリ、ヤマスカシユリ、サドクルマユリ、ヒメサユリ、カノコユリ、タキユリが日本に自生する日本固有のユリであり、台湾から園芸種として持ち込まれたとされる高砂百合(テッポウユリ)などを含めると、日本に自生するユリは非常にカラーバリエーションに優れ、気候風土の異なる日本全国に分布するユリは、当時の海外の品種ハンターからすれば『宝』であったに違いありません。かの有名なオランダの学者シーボルトも1828年にオランダへ持ち帰った記録(発芽はしなかった?)があり、ヨーロッパへ渡った日本のユリはその数年後、一大ブームを海外で巻き起こします。



日本から輸出される球根

特に、横濱植木商会(現横濱植木株)などを介し横浜港から出荷されたテッポウユリは、ピーク時の輸出は4000万球を上回り、絹糸と並ぶ日本の主要輸出品目となり、明治・大正の外貨獲得に大きく貢献したようです。その後、残念ながら日本で自生する固有種のほとんどは自生地の開発や乱獲により現在では絶滅危惧種や準絶滅危惧種に指定され、身近で見ることにはほとんど出来なくなりました。また、日本から輸出されていたテッポウユリの球根も価格の暴落、ウイルスの問題などにより昭和10年ごろをピークに減少に転じ、戦争のため輸出は完全に途絶えてしまいました。



ヒット品種 オリエンタルユリ カサブランカ

しかし、オランダに持ち込まれた日本のユリはオランダの育種会社により品種改良、増殖されていきました。今から約50年前には日本のヤマユリ、カノコユリ、タモトユリ(既絶滅)を基にオリエンタルユリが作出され、皆さんご存じの大ヒット品種『カサブランカ』や『スターゲイザー』などが生まれました。

また、オランダではさらに豪華さや、色のバリエーション、栽培の容易性などを求めて品種改良が進み、現在ではオリエンタル(O)ユリとランペット(T)リリーを掛け合わせたOTハイブリット、ロンギフローラム(鉄砲)ユリ(L)とアジアティック(スカシ)ユリ(A)を掛け合わせたLAハイブリットなどが作出され、オランダの輸出会社を通じて日本へ年間1億球以上が輸出されています。例えば、比較的栽培が容易なヤマユリ(アウラタム)『ゴールドバンド』『バージネイル』や珍しい八重咲きオリエンタル品種の『アスカ』、香り高いオレンジ色のOTハイブリット『サルタレロ』など鉢や切花、花壇などで身近に楽しめる様々な球根が園芸店などで気軽に購入できます。このユリ達も紛れもなく日本の固有種から生み出された品種なのです。

皆様もかつて世界を席卷した日本のユリ達を想いながら、その血を受継ぐ最新のユリを愛でてみてはいかがでしょうか？



現代の八重咲きの品種 オリエンタルユリ アスカ